剱岳慕情

本郷　好樹

北アルプスの名峰、剱岳（２９９９ｍ）を目指し三泊四日の縦走に向かったのは、私が未だ二十の遠い昔であった。

山男の友人に勧められ渋々従った。元々山育ちで千メートルクラスの山は庭の様に遊んでいたので別に喜びは無かった。当時は地元の高校を卒業して大学進学も適わず、憧れの東京に就職したものの二年で都落ちした。原因不明の奇病に罹って体も壊していて、その上大失恋中で人生最悪の時だった。

諸般の事情で、山歩きもこの際良いかと出掛ける事にした。体調も何とか戻って、親のトラック運送業を手伝っている頃で時間もあった。完全装備もない侭で気楽に参加した。山は走り回っていたところと本当に軽い気分であった。

昭和三十四年七月二十七日から三泊四日の縦走だ。美女平から歩き出して、弥陀ヶ原、天狗、室堂、一の越、そして立山だ。ここまで六時間歩いて立山から別山を経由、六時間半歩いて、剱沢小屋だ。やっと剱岳を仰いでアタックだ。

頂上を目指し蟹の横ばいに来た時、一瞬俄に雨風に吹かれ動けなくなった、どうする！

「登りましょう」

目指す剱を背に一服
S34.7.27～30

「いや、下山だ」
先輩のリーダーが決定して下山をしたが、山は登るより下りの方が勇気がいるし、無理は禁物だと教わった。帰りは雷鳥沢、地獄谷、天狗と四時間半歩いて弥陀ヶ原に出て無事三泊四日の行程を終わったが、登頂出来なかった剱は今も心に残っている山である。
今は亡き山の先輩からの忘れられない手紙を貰った。
〔お前もとうとう山に登ったか、多分素晴らしかったことだろう、汗をかきかきふらふらになりやっとたどり着いた頂上、空気が素敵に甘く憩いの何と美味い事か、視界一杯霧に抱かれたアルプスの山脈が飛び込み、お前は思わずヤッホーと思い切り叫んだに違いない。幾千年を風雨にさらされたあらい岩盤に引っ繰り返り大空を仰ぐ、何んにも聞こえないそして見えない唯我が身あるのみ、目を瞑る……雪渓が溶け谷川に注ぐ水、清水そんな純粋な物を感じたに違いない。
軈て一面にガスが立ち込め、あぁここはアルプスなんだと思いそろそろ下山の支度にかかる。他の幾組かのパーティーは既に数百メートルも先を黙々と進むのが見える。
お前はやや軽くなったリュックを肩にトボトボ後に従う、そうトボトボとね。山を下りる時の気持ち、虚無的と言うか何と言うかただトボトボと歩く、そんな形容がぴったりだ。どうですこんな調子じゃ無かったかい？
その日のお前の日記はこんな具合に何頁も埋められた事だろう〕
何度読んでも味わいのある手紙だ。就職先でトラブルがあり行方不明になった侭、葬式も四年挙げられなかった、この手紙をくれた直後に行方不明になったのだ。友人の間では死亡が噂されたが手紙には死を予感させるものは無かった。奴の事だから深い山に抱かれていると信じている。この剱岳登山は実に色々な事を教わったと感謝している。